

●中国ブロック記念講演

平成16年11月17日(水)メルパルク広島

玉座とその空間

服部等作 広島市立大学 芸術学部デザイン工芸学科 大学院 芸術学研究科 主任教授



「玉座」とは

世の中にはトップの座がある。会社には必ず社長用椅子、また国では大統領執務室、パチカン教国は閔見の間といった空間に歴代の「座」がある。このような特別な主の座は、いわゆる玉座とも呼ばれ、王様、法王、皇帝といった、いわば特別象徴的な座である。

近年オフィスの環境づくりで椅子に関心が集まっているが、椅子は調度品の一つに過ぎない点から本質的に空間や環境要素として考える必要がある。

古代のオフィス、いわゆる「玉座の間」と呼ばれる玉座が置かれる空間があった。

ここで象徴的空間の条件を特別な人物の座、古代では神像などの偶像(モノ)を置く空間も含めれば、従来から支配的である椅子の特別高級なものを「玉座」とし、さらに今日、玉座がほとんど残されていないため、比較的エジプトやギリシャ世界で残った玉座をその原形とする見解は一面的と言える。

ここでは、椅子を超越する環境装置としての玉座とその象徴的な性格がいつごろ誕生し発展を見たのか、その舞台を世界最初に誕生したメソポタミア文明に求めてみる。舞台となるチグリスとユーフラテス河からなる「両河の中」の名称に由来する地は、古くシュメール、アッカドと呼ばれ現在のイラクの南半分に対応する。この地に長期にわたり自らの生活光景を彫り込み製作・利用された今日の印鑑に相当する「しるし」である古代の印章の図像に座像が表現されている。そこには様々な光景が彫り込まれているため、文献

にかわりうる重要な内容が含まれている。

「玉座」のなりたち

紀元前3000年のメソポタミア南部ジェムデド・ナスル遺跡から出土した印章図像には、集団で床座した作業光景の中にスツールに座る人物が登場する。特に巫女風の人物がスツール上で片立て膝の床座をとる神殿前の儀式で他の人物は、地面に直接床座や小さく表現された像と比べ著しい表現差がある。

本格的な倚座像は、紀元前約2500年頃ウル王墓群から出土した印章に彫刻された饗宴図に現われる。当時のビールを飲み椅子に座る人物とその周囲に演奏者や侍従の姿があり、銘文と共に酒宴の光景から王妃と判断できる特別な階級であることが分かる。しかしこの倚座人物の場合は、玉座の性格を一部含むものの環境装置には至っていない。

環境装置としての玉座の性格が強化されるのは紀元前2334～2004年のアッカドからウル第三王朝代である。

倚座像には足台が、さらに座の空間の延長に基壇、天蓋(屋根)が加わる。当時の王の象徴として王冠、王杖、椅子の組み合わせがあり、王自らが神と閔見する場面に足台、基壇、天蓋が描かれ、空間要素を備えた座は、「玉座の間」の調度品を越え、環境装置としての性格を備えていることになる。

環境装置としての玉座

紀元前8世紀頃の新アッシリア帝国では、玉座が象徴品であったことが分かる。帝国のニムルド宮殿の壁画に兵士が玉座や宮廷家具を戦利品として敵

国から略奪する場面があり、玉座の間の調度品全てが王や王家の象徴として戦利品にする様子が分かる。

エジプトの新王朝で紀元前13世紀頃のツタンカーメン王玉座の表面には、薄い金の板を打ち出し色々な宝石を象嵌し装飾する。やはり足台や天蓋が付属し、環境装置化の工夫がある。

時代が下がり紀元前4世紀頃のアケメネス朝ペルシャでは、玉座の体裁が完成する。重厚な構造、その座面を領地の人々が支える玉座のデザインに足台、そして基壇が加わり聖なる象徴として天蓋が付いた玉座は、地面/天空を分かち環境装置として完成形を示している。その製作には、最高の技術と宮廷職人が総動員されている。

特別な座として玉座を取り上げたが、玉座は、座であって座ではない。目下の者はもちろん、王家の一族とも地平を分かち、その座を宇宙の支配者に連なるよう神の代理執行人である自らの象徴性を獲得する環境装置として位置付けられよう。

椅子のデザインを大学3年の実習課題にしている。20世紀の著名作家による椅子を収集する大学資料館では、学生自らが座し、図面をおこし、学生のデザインによる新たな椅子を創作し、作品をコンペに出品、社会の評価を受ける。

生産・経済性が優先される今日の椅子事情で、この課題を通じ、デザインに本来、象徴性を持つ座の性格を授業で伝えている。まだまだ環境装置として座の教育には課題が多く残る。